

研究論文

中学生の将来イメージに影響を及ぼす要因と家族機能との関連

池田 幸代*

Relationships Related Factor in Process Image and Family Function in the Junior High school Students

IKEDA Yukiyo

Key words：中学生、将来イメージ、家族機能

要旨

本研究は家族機能から持つ子どもの認識が、将来イメージにどのような影響を及ぼすか、その関連を明らかにすることを目的として、中学生に対する質問紙調査を実施した。

その結果、家族の機能が健全に働くことによって、子どもはポジティブな将来イメージを持てるようになるという仮説が部分的に支持された。また自信や満足感より温かな安心や幸福感は、将来イメージをポジティブにとらえるのみならず、具体的で現実的な将来イメージの構築に関与する可能性が考えられた。

従って、特に中学生という進路決定の大きな転換期には、家族だけではなく保育者や教育者も指導において、子どもを励まし、肯定し、自分への満足感を高めるのみならず、愛情豊かに育み、その愛情を子どもに伝えることが有効なキャリア教育になり得ると考えられる。

I 問題と目的

我が国においては、多くの児童が義務教育を終えた時期に、自身で最初の進路決定を行うと考えられる。この中学生の時期は、Erikson (1959) の提唱した 8 つの発達段階によれば、「勤勉性」対「劣等感」を発達課題とする第 4 段階の学童期と、「自我同一性」対「自我同一性拡散」を発達課題とする第 5 段階の青年期のはざ間に該当するだろう。また、Herschenson (1968) は Erikson の発達段階説に示唆を得て、職業的発達の段階を構成した。Herschenson は人間の一生を職業的発達の観点から捉え、5 つの発達段階に区分している。これらの段階は、①社会的羊膜 (social-amniotic) の段階、②自己分化 (self-differentiation) の段階、③有能性 (competence) の段階、④独立 (independence) の段階、⑤積極的関与 (commitment) の段階とされている。中学生期は、「自分にできること」の中から「自分がしよと思うこと」を決定する④の独立段階を目前にした、③有能性の段階といえよう。すなわち、自己の能力・有能性の限界を確かめようとする。「自分には何ができ、何ができないのか」試そうとするのである段階であり、前段階に発達させた態度や価値が、そのような試みの向けられる領域の選択に影響を及ぼすとされている。そして、内藤 (1991) は、進路意識にかかわる職業的発達段階として、生きる手ごたえ探索期 (乳幼児期・児童期)、生きがい探索期 (中学生期・高校生期・大学生期)、生きがい発見・追求期 (成人期)、生きがい創造期 (老年期) の 4 段階を示している。この段階によれば、中学生期は生きがい探索期初期であり、好みや興味・関心だけの将来像から、自分が希望している職業に関して、それに就くための情報 (適

* 埼玉東萌短期大学 (Saitama Toho Junior College)

性・就けるための可能性)や就いてからの情報(収入や労働時間など)を親や教師友人などから入手し吟味し始める時期である。

このように、中学生の時期は、人生においてそれまで蓄積した知識・経験から、将来に対するイメージを構築する決断を迫られる、重要な転換期であるともいえる。若者の将来イメージに対して、池田(2009)は、専門学校生・大学生らを対象として調査を行っている。その結果、人間関係の良さがポジティブな将来イメージ構築にプラスに作用すること、周囲の大人がよいモデルとなることで若者はポジティブな将来イメージを描くようになること等を示している。中学生にとって周囲の大人とは、教員の存在も考えられるが、それまで内包され、守られ、その独自の価値観や文化の影響を受け、何より人間関係の基礎を育んだ親や家族であることが多数であると予測される。またこの時期、親子関係・家族関係の軋轢より、多くの問題行動が起きる不安定な時期であることも周知である。それは、上記のように家族関係の外に出て、家族とは異なる価値観や文化を身につけ、新しい自分としての進路を見つけようとする変化の時期であることも影響していると考えられる。また、家族は子どもの周りにただ存在しているのではなく、家族としての機能が働いてこそ、子どもに影響を与えるものである。ゆえに、家族機能が健全に働くことによって、子どもはポジティブな将来イメージを持てるようになるという仮説を立てた。こうした家族定義を前提に、本研究においては、家族機能から持つ子どもの認識が、将来イメージにどのような影響を及ぼすか、その関連を明らかにすることを目的とする。この結果を検討することにより、多様化する家族の在り方への示唆を得、また今後の中学生に対するキャリア教育の一助になると考える。

Ⅱ 方法

2010年10月から11月にかけて、東京都内の中学生195名に質問紙によって調査した。

1. 調査対象者の属性

- ・対象者：東京都内の中学生
- ・対象者年齢：13～15歳
- ・対象者人数：195名
- ・性別：男子85名 女子110名

2. 質問紙の配布・回収

質問紙は学校への直接手渡し、配布・実施・回収を依頼した。回収率は95%であった。

3. 質問項目

(1) クリッツバーグによる家族機能尺度、以下10項目について質問した(齊藤1996『アダルトチルドレンと家族』より引用)。

- ① 家族のルールは重い
- ② 家族内で自分の役割があり負担である
- ③ 他人には言えない秘密がある
- ④ 家庭内は堅苦しい雰囲気が漂っている
- ⑤ 家族内には束縛がある
- ⑥ 家族それぞれの悩みは家庭内で認められず無視される
- ⑦ 家に来客者が訪れるのは嫌だ
- ⑧ 家族の変化は嫌だ

- ⑨ 家族に一体感はない
 ⑩ 家族から離れる事は出来ない

評定尺度は「かなりそう思う」から「全くそう思わない」の4段階評定である。

(2) 現在の自身に対する認識、以下2項目について質問した。

- ① 家族からの愛情を感じているか
 ② 今の自分に満足しているか

評定尺度は「かなりそう思う」から「全くそう思わない」の4段階評定である。

(3) 自分の将来についての認識、以下2項目について質問した。

- ① 自分の将来について希望を感じているか
 ② 自分の将来の目標や夢はあるか

評定尺度は「かなりそう思う」から「全くそう思わない」の4段階評定である。

4. 分析

質問紙の各項目に対する回答を得点化し、項目間の関連を探るために Pearson の相関係数を算出する統計処理を行った。

Ⅲ 結果

結果を Table.1 に示す。以下の統計処理は、SPSS 17.0 を用いて行った。

Table.1 各項目間の相関係数

	家族機能の健全さ	家族から愛情を感じている	今の自分に満足している	自分の将来に希望を感じる	将来の目標や夢はある
家族機能の健全さ	—				
家族から愛情を感じている	.329 **	—			
今の自分に満足している	.261 **	.280 **	—		
自分の将来に希望を感じる	.152	.120	.302 **	—	
将来の目標や夢はある	-.028	.250 **	.133	.272 **	—

**= $p<.01$, *= $p<.05$

1. 家族機能の健全さ

家族が健全に機能しているという認識と、有意に強い正の相関を示した項目は、家族から愛情を感じている ($r=.329^{**}, p<.01$)、今の自分に満足している ($r=.261^{**}, p<.01$) であった。

2. 家族から愛情を感じている

家族から愛情を感じているという認識と、有意に強い正の相関を示した項目は、家族機能の健全さ ($r=.261^{**}$,

$p<.01$)、今の自分に満足している ($r=.280^{**}, p<.01$)、将来の目標や夢はある ($r=.250^{**}, p<.01$) であった。

3. 今の自分に満足している

今の自分に満足しているという認識と、有意に強い正の相関を示した項目は、家族機能の健全さ ($r=.261^{**}, p<.01$)、家族から愛情を感じている ($r=.280^{**}, p<.01$)、自分の将来に希望を感じる ($r=.302^{**}, p<.01$) であった。

4. 自分の将来に希望を感じる

自分の将来に希望を感じるという認識と、有意に強い正の相関を示した項目は、今の自分の満足している ($r=.302^{**}, p<.01$)、将来の目標や夢はある ($r=.272^{**}, p<.01$) であった。

5. 将来の夢や希望はある

自分の将来に夢や希望があるという認識と、有意に強い正の相関を示した項目は、家族から愛情を感じている ($r=.250^{**}, p<.01$)、自分の将来に希望を感じる ($r=.272^{**}, p<.01$) であった。

IV 考察

1. 家族機能の健全さ

本研究においては、家族機能が健全に働くことによって、子どもはポジティブな将来イメージを持てるようになるという仮説を立てたが、この仮説は部分的にしか支持されなかった。すなわち、直接的には「家族から愛情を感じている」「今の自分の満足している」といった、現在の自分自身が家族の愛情に包まれている満足感と、自己肯定感との関連しか見いだせなかった。家族機能の働きは、現在の子どもの意識と強い関連を持つが、将来イメージの構築には、関連がないことが明らかになった。

2. 家族から愛情を感じている

家族から愛情を感じているという認識は、家族機能が健全に働いていることと関連が強いことは明らかになったが、「今の自分に満足している」「将来の目標や夢はある」といった、現在の自分への肯定感と、将来への目標や夢を持っているという、具体的な将来イメージと強い関連があることが明らかになった。親から愛情を受けているという、自信や満足感、安心感は、自己肯定感を高めるだけではなく、将来の目標や夢を持つという、具体的なイメージの構築と関連することが示された。

3. 今の自分に満足している

今の自分に満足しているという認識は、先にも述べたように家族機能の健全さ、家族から愛情を感じている以外に、自分の将来に希望を感じることに強い関連があることが明らかになった。自己肯定感は、健全な家族機能と家族の愛情を感じることに関連するのみならず、自分の将来に対して具体的ではないがポジティブなイメージを持てることに関連することが示された。また、家族機能の健全さは、直接的には将来イメージの構築と関連がみられなかったが、今の自分に満足しているという認識が、ポジティブな将来イメージと強く関連しているということは、自分へのポジティブな認識を媒介して、間接的に関連することが示唆された。

4. 自分の将来に希望を感じる

自分の将来に希望を感じるという認識と、有意に強い正の相関を示した項目は、今の自分に満足している ($r=.302^{**}, p<.01$)、将来の目標や夢はある ($r=.272^{**}, p<.01$) であった。自分の将来に希望を感じるという認識は、今の自分に満足しているという自己肯定感、そして将来をポジティブにイメージしていることは、具体的な将来の夢や希望を持っていることとも関連していた。これらの相関からも先述のように、家族機能の健全さは、今の自分に満足しているという認識に媒介され、間接的にポジティブな将来イメージと強く関連しているということが示唆された。

5. 将来の夢や希望はある

自分の将来に夢や希望があるという認識と、有意に強い正の相関を示した項目は、家族から愛情を感じている ($r=.250^{**}, p<.01$)、自分の将来に希望を感じる ($r=.272^{**}, p<.01$) であった。自分の将来について具体的な夢や希望を持っていることは、家族から愛情を感じているという認識と関連しており、また同じ将来イメージである自分の将来に希望を感じることに関連していることが明らかになった。これまでみてきた項目同様、家族機能の健全さは、直接的に将来への夢や希望があるという認識と関連がみられなかったが、家族からの愛情を感じているという認識を媒介して、間接的に、具体的でポジティブな将来イメージの構築に関連していることが示唆された。

V 総合考察と今後の課題

本研究において、家族の機能が健全に働くことによって、子どもはポジティブな将来イメージを持てるようになるという仮説は、部分的に支持された。すなわち、家族機能の健全さは子どもに対して、直接的に将来へのポジティブなイメージを持つこととは関連しないことが明らかになった。しかし、その健全さは、子どもが家族から愛されている実感を持ったり、自分に満足したり、子どもの今現在を温かく肯定する認識と関連することが明らかになった。そして、この肯定的な自己認識は、ポジティブな将来イメージの構築と関連していることが分かり、家族機能の健全さは、間接的に子どものポジティブな将来イメージ構築に関連しているという示唆を得た。

また、子どもの現在の肯定的な自己認識である、家族から愛情を感じている認識と今の自分に満足している認識については、それぞれ将来への希望を感じることは家族からの愛情が、将来の夢や目標を持つことには自分への満足感が関連していた。この結果は、自己肯定感という自信は漠然としたポジティブな将来イメージの構築につながり、家族から愛情を受けている安心や幸福感は、具体的な目標や夢を持つ将来イメージにつながることを意味する。つまり、自信や満足感より温かな安心や幸福感は、将来イメージをポジティブにとらえるのみならず、具体的で現実的な将来イメージの構築に関与する可能性が考えられる。

ゆえに、家族だけではなく保育者や教育者も指導において、子どもを励まし、肯定し、自分への満足感を高めるのみならず、愛情豊かに育み、その愛情を子どもに伝えることが有効なキャリア教育になり得るといえるだろう。特に中学生という進路決定の大きな転換期には、重要であると考えられる。

しかし、今回の分析は家族機能の健全さと他の項目との相関係数の関連をみたのみであり、今後は家族機能の健全さを独立変数として、どのような従属変数に影響を及ぼすのか、その因果関係を明らかにすることで、より詳細で正確な中学生の将来へのイメージと家族の役割を探ることを課題としたい。

付記

本研究で用いたデータは、佐久間梢氏が指導教官であった筆者の指導のもと、上智社会福祉専門学校平成 20 年度卒業研究執筆のために収集・分析したものである。本稿は、筆者がそのデータに基づき、新たな分析・考察を行った。

引用文献

- Erikson, E. H., 1959 Identity and the life cycle, International Universities Press, (小此木啓吾・小川捷之・岩男寿美子訳 1973 自我同一性 誠信書房) .
- 高瀬克義 1991 高校生の学校適応感研究と進路指導 内藤勇次(編) 生き方の教育としての学校進路指導 北大路書房,42-43.
- Hershenson,D.B., 1968 Life-Stage Vocational Development System Journal of Counseling Psychology,15(1), 23-30.
- 池田幸代 2009 若者の将来イメージに影響を与える要因について——専門学校生と一般若者との比較—— 上智社会福祉専門学校紀要, 4.
- 斉藤学 1996 アダルトチルドレンと家族 学陽書房.